『万葉集』と欧文挿絵本
―その今日的意義について―

井上さやか

一　はじめに

本稿で取り上げるのは、明治時代に『万葉集』から明治期までの日本の詩歌を抄出しドイツ語に翻訳して出版された、カール・フローレンツの *Dichtergrüsse aus dem Osten*（邦題：東の国からの詩の挨拶）[1]である。この本は縮緬様の和紙に多色刷りの挿絵を全ページにあしらった、いわゆる「ちりめん本」の一種である。

筆者がこの美しい書籍と出会ったのは、ドイツ文学者である加藤耕義氏（学習院大学外国語教育研究センター教授）の導きによるものであった。加藤氏はこの書が、日独比較文学・比較文化の史料として重要であることを説かれている。縁あってお会いした際に、筆者が万葉集研究を志していることを知って実物を見せてくださったのであるが、そのときはまだ、書籍としての美しさと物珍しさに心奪われはしたものの、万葉集の外国語訳絵本という程度の認識しか持っていなかった。その後、佐佐木信綱著『萬葉集事典』にも、万葉集の翻訳書の一つとして既に紹介されていたことを知った[2]。機会を得て私に入手するに至り、奈良県立万葉文化館企画展「万葉集との出会い―万葉文化館コレクションより―」（会期：平成十七年十月二十二日～十一月二十七日）において紹介することができた[3]のも、加藤氏のお陰である。

後述するように、この書の大半は万葉歌のドイツ語訳である。そのことから、少なくとも編著者であるフローレンツにとって、日本における特徴的な文学作品といえば『万葉集』であったことは疑い得ない。しかし、今日の日本上代文学研究においては、まったくといってよいほど知られていない。いったい本書にはどのような万葉歌が取り上げられているのか、そして、それは果たしてどのような意味を持つのか。そこには、『万葉集』を客体化し研究するための有用な視点が示されているのではないだろうか。

そこで本稿では、その具体的な一例である『東の国からの詩の挨拶』を取り上げて、先行研究を踏まえながら若干の私見をまとめ、報告しておきたい。

二　解題と研究史

本稿で取り上げるカール・フローレンツの『東の国からの詩の挨拶』は、『萬葉集事典』（典籍篇・雑載・翻訳）に次のように紹介されている[4]。

和歌集　　一冊　刊　　フロレンツ

体裁 仮洋装。縦六寸四分。横五寸二分。表紙は、富士山に湖水、帆船、龍を配せる美しき色刷。料紙檀紙。標題 Dichtergrüsse aus dem Osten Japanische Dichtungen. 内容 和歌・俳句・新体詩等五十余首を独訳し、錦絵風の風景、人物等の絵を色刷にして配せり。うち、万葉集の歌三十余首を訳出せり。備考 東京日吉町、長谷川商店発行、独逸、ライプツイグのアメラングにて発売。明治二十七年八月発行。

残念ながら関連する図版等は掲載されていないが、本書は、オリジナルの帙も含めて全ページ多色刷りの美麗な本である［写真1、写真2参照］。縮緬様の和紙による独特の手触りも愉しい、いわゆる「ちりめん本」の一種である。

「ちりめん本」については、石澤小枝子氏の『明治の欧文挿絵本—ちりめん本のすべて』[5]に詳しい。それによれば、明治時代を中心に外国人向けに英語やドイツ語・フランス語など諸外国語によって日本の文学や風俗を紹介した、美しい多色刷りの和綴じ本の総称を欧文挿絵本といい、多くの場合、縮緬様の和紙を用いることから、「ちりめん本」とも通称されるとある。主な版元は長谷川弘文社であり、長谷川武次郎を中心とした職人たちの手によって国内で印刷・製本され、イギリス・ドイツ・中国など海外で販売された。主な出版物に日本昔話のシリーズがあり、バジル・ホール・チェンバレンやラフカディオ・ハーンら、錚々たるメンバーによる英語版がよく知られている。同シリーズは、フランス語版、ドイツ語版、オランダ語版、スペイン語版、ポルトガル語版でも出版されたとある。そのほかにも、ハーンの五冊本やチェンバレンのアイヌ昔話シリーズ（平紙本）や、単発の挿絵本などが刊行された。そのひとつが、『東の国からの詩の挨拶』であった。

石澤氏いわく「数ある弘文社の『ちりめん本』の中でも貴重な一冊」であり、「フローレンツの熱意に呼応して武次郎の本造りにかける情熱が最大限に発揮され」た品格のある書であるという。その甲斐あってか、刊行から幾度も版を重ね、一九一二（明治四五）年には十四版を数えたという。[6] また、一八九六（明治二九）年には、フローレンツのドイツ語訳をもとにしたアーサー・ロイドによる英

写真1　表　　紙

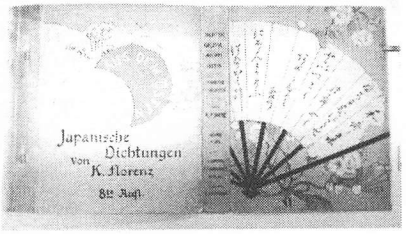

写真2　帙

訳版も出版されている。[7] かなりの好評を博したらしく、当時のドイツ語文化圏において、フローレンツの書を媒介として『万葉集』が知られていったことが理解される。事実、その後、詩人のハンス・ベートケがこの書をはじめとするフローレンツによる日本古代詩歌のドイツ語訳をもとに、ドイツ語詩として換骨奪胎した詩集『日本の春』を残している。[8] そしてそのベートケの詩集をもとにして、ゴットフリート・フォン・アイネムやイルゲンス・イェンセンが、それぞれに歌曲集をも作るに至った。[9] このように、ヨーロッパにおけるジャポニズムの隆盛にも一役買ったらしい。

しかし、発刊当時、日本人からの批判は大きかったようである。『帝国文学』第一号によれば、同学会への寄贈図書の記念すべき第一冊目は、フローレンツによる『東の国からの詩の挨拶』であったとある。[10] フローレンツはこの頃帝国大学で教鞭を執っており、発足時からの同学会員でもあった。

その書に対して、上田万年は同誌の第二号において「これにてはあまりに原作が、可愛想なる者とはなり了らずや」と痛烈な批判を発表した。[11] 俳句など短句の翻訳は二行程度で工夫すべきというのが主意であった。続く第三号に上田の批判に対するフローレンツの反論が掲載され、第五号にまた上田の反論が、そして第七号にフローレンツの再反論が、さらに第九号に上田の再反論が掲載され、同誌上において論争が起こった。具体例として取り沙汰されたのは俳句の訳であったが、短詩型を旨とする日本詩歌の感動を多くの言葉を補って説明することで異なる言語文化圏へ伝えようとする、翻訳の是非をめぐっての論争であったといえる。

この「最初の比較文学論争」を紹介して、千葉宣一氏は次のように指摘した。[12]

> 日本文学の《民族性と国際性》のモメントを中心に、発動国と受容国の位相差を反映した、この上田万年・フローレンツ論争は、必ずしも理想的に、共通の土俵で論理が発展し、創造性ゆたかな多くの教訓を残したわけではない。フローレンツの日本文学に対するエキゾチシズム的な問題関心が、ユニバーサルな普遍的要素に向けられたのに対して、国学的ショウビニスムの学風を否定した上田万年が、にもかかわらず結果的には、日本文学の民族的特質を過大評価？　せざるを得なかったのは、ヨーロッパ文化の植民地的状況から、一日も早く独立宣言を発布する日の到来を祈念する、コロニヤル・コンプレックスに起因する反作用であった。比較文学論争の嚆矢が、かかる翻訳文学論争であったことの必然性とその史的意義が、いまだ正当に認識されていないのは残念である。

千葉氏も指摘するように、上田万年の批評は最後には、「徒に嫌

悪と焦燥に満ちた私的感情が露呈するのみ」に陥ってしまっている。

フローレンツは、明治期の東京帝国大学においてドイツ語・ドイツ文学などを教授し、日本滞在中にドイツ文献学の精華を若き日本人達に伝授したとされる人物である。フローレンツの業績と近代日本における学術研究への多大なる影響、そしてそれらがなぜ現在の日本においてほとんど知られていないかについては、佐藤マサ子氏『カール・フローレンツの日本研究』[13]に詳しい。ことに、日本における上代文学研究、古代史研究の分野に関して、近代的な研究態度をもたらしたことは、特筆に値する業績であると指摘されている。

かつて、西欧文学との対照によって自国の文学を客観視し、「国文学」の自覚が促されたように、『万葉集』を客観視するための外部の視点を得る意味で、本書は忘れられた過去の遺物ではなく、現在も見過ごしにはできない資料であるといえよう。しかし、フローレンツの業績は、現代日本のことに上代文学研究においてほとんど知られていないのが現状である。その理由は、上田万年が見せたような感情的な点だけではないであろう。佐藤氏によれば、次のようなことが考えられるという。

ひとつには、これまでの研究対象がいまだアーネスト・サトウやW．G．アストン、B．H．チェンバレンのような英語圏に絞られている傾向があり、ひとつには、近代日本におけるドイツ文献学の享受は、ヨーロッパ近代の文学研究方法の導入の具体的実践例であったために、フローレンツ自身も依拠していたベエックなどのドイツ文献学の原典のみが掲げられ、フローレンツの研究態度はむしろ地下水脈のように取り込まれたためではないかと指摘する。さらに、当時の日本はまだ、現代のように上代文学を客観的に批評することが可能な時代ではなかったこと、そしてその後の日独関係の変化によるドイツ語熱の低下、なども一因となったのではないかとある。[14]

そもそもフローレンツは、ドイツにおける近代日本学の始祖であり、その著書『日本文学史』[15]は、今日に至るまで日本研究の基礎的な書であり続けているという。[16]すでにほぼ完成していた『万葉集』の全訳注釈は、不幸にも第一次世界大戦によって失われたらしいが、[17]『東の国からの詩の挨拶』や、『日本の神話』[18]、そして万葉集や記紀・祝詞などの日本語文献に直接あたって客観的な文献批判を行うことで『日本文学史』を著した意義は大きいと指摘する。しかし、そのような研究活動とその成果が、日本においてどのような意味を持ったのかは、ほとんど問われてこなかったともある。

古典文学は、時代によって読み替えられながらも今に生きる作品である。なかでも日本における『万葉集』は、近代において「国民歌集」として位置づけられたことで「発明」されたとも指摘される。[19]日本語を母語とする人々が近代国家を形作る上で重要な役割を

果たしたと考えられる一方で、日本語を母語としない人々によって発見された「日本」でもあったことだろう。むしろ、そうした人々によって発見された「日本」的な文学作品が、その後の「国文学」の近代的な学術研究の基盤を作ったといえるのかもしれない。カール・フローレンツもそうした一人なのである。

ドイツ文学は筆者の専門ではなく、ここで具体的な翻訳表現の善し悪しを論ずることはできない。しかし、直接の影響関係のみならず、視点としての対照比較が上代文学研究にも不可欠であると思われる。今日の日本文学研究が諸外国の文学作品の影響や翻訳の問題と切り離すことができないように、上代日本文学においても、中国文学の影響・翻訳と無関係でなかったことは、周知の事実である。

今日では当然ともいえるテキストの客体化は、上代文学研究史においては、フローレンツによってもたらされていた。今日の上代文学研究が次に問われるのは、作品の背景にある思想等の客体化とともに、日本文学研究史の客体化および文学研究の現代的な意義付けであると考える。

三　万葉歌の偏重

そこで次に、この書には具体的にどのような歌が採りあげられているかをみてみたい。

本書の概要を知るために、まずは目次部分を次に掲出しておく。[20]

INHALT

I. Herzblätter:

Klage des Dichters Okura über den Tod seines Sohnes. (Manyōsyū 5, Verfasser Okura)

Höchster Vaterstolz (Manyōsyū 5, Okura)

Mutterliebe (Manyōsyū 19, Frau Sakanouhe. An ihre Tochter, die Frau des Dichters Yakamochi, gerichtet).

Schifferlied (Altes Kagura-Lied).

Mann und Frau (Manyōsyū 13)

Blumentrost (Manyōsyū 18, Yakamochi).

Die Perlen von Susu (Manyōsyū 18, Yakamochi).

Der Einzige (Manyōsyū 13).

Keine Nachricht (Manyōsyū 13).

Erwartung (Manyōsyū 13).

Liebesgeheimnis (Manyōsyū 13).

Sehnsucht (Manyōsyū 13).

Abend-Orakel (Manyōsyū 13).

Volkstümhches Liebeslied (Modern).

Endlose Liebe (Manyōsyū 13).

Das Mädchen und ihr Hund (Manyōsyū 13).

Heimhche Liebe (Manyōsyū 13).

Treues Gedenken.

Vergesslichkeit (Kokinsyū, Sosei).

Vanitas Vanitatum (Kokinsyū).

Zornige Eifersucht (Manyōsyū 13).

Mädchen ohne Begleitung (Manyōsyū, 9).

II . Naturgenuss:

Frühlingsahnung (Kokinsyū).

Frühlingsankunft (Manyōsyū 13).

Frühling und Herbst (Manyōsyū 1, Prinzessin Nukata).

Die vier Jahreszeiten.

Kukuks Erwartung (Manyōsyū 19, Hironaka).

Kukukslied (Sanesada)

Mondnacht

Augentäuschung (Arakita Moritake).

Der Berg Mimoro (Manyōsyū 13).

An den Wasserfall von Otoha (Kokinsyū, Tadamine).

Der Wasserfall von Yoshinu (Manyōsyū 13).

Die Regenwolke (Manyōsyū 18, Yakamochi).

III . Ernst des Lebens:

Unbestand alles Irdischen (Manyōsyū 19, Yakamochi).

Vergänglichkeit (Manyōsyū 13).

Ein Gleiches (Kokinsyū, Tsurayuki, 2 Gedichte).

Ein Gleiches (Kokinsyū, Chisato).

Menschenleben (Manyōsyū 5, Okura).

Der unwillkommene Gast (Kokinsyū).

IV . Höfische Dichtung:

Jungwasser für den Kaiser (Manyōsyū 13).

Am Brunnen zu Ishi (Manyōsyū 13).

Treue Wünsche für den kaiser (Manyōsyū 6).

V . Bunte Blätter:

Das trügerische Lotosblatt (Kokinsyū).

Schwanengesang eines sterbenden Dichters.

Volkstümliches Trinklied (Ein Saibara).

Auf einen abgenutzten Besen.

Tiefe Wasser rauschen nicht (Soseihosshi).

Ohnmacht (Izumi shikibu).
Verführung.
Rechenschaft (Kokinsyū).
Frau und Nebenfrau (Kyorai).
Falsche Abhülfe (Hokushi).
Der misverstandene Konfucius.

VI. Anläufe zur Epik:
Jung Urashima der Fischer (Manyōsyū 9).
Erinnerung an das Erdbeben vom 2, Oktober 1855 (Modern, M.Toyama.)
Nächtlicher Ueberfall bei Okehazama (Modern, Nakamura).

ANMERKUNGEN　　（※傍線は筆者）

一見してわかるとおり、傍線を引いた万葉集からの歌が過半数を占める。各章のテーマは、石澤氏の紹介によれば、一章　愛するものたちに／二章　自然の楽しみ／三章　人生の厳しさ／四章　宮廷詩／五章　色とりどりの言の葉／六章　叙事詩いくつか、である。第五章以外では万葉歌が積極的に採用されていることから、このような章立てそのものも、古代から現代までの日本の詩歌のなかで万葉歌をもっとも尊重した上で分類された結果と考えられる。

石澤氏前掲書には、次のようにある。

序文では、日本には実に豊かに詩があること、その特徴についてはその多くが短詩型であり、独創的な表現も見いだせるが、まず何よりも独特の日本的言語表現には技巧をこらしていることを述べている。詩的内容をもっとも多く盛っているのは、日本最古の歌集である八世紀の『万葉集』にほかならないとも言っている。フローレンツがこの詩歌集に収めたのは大部分が『万葉集』からの歌であり、後世のものはごく僅かしかとっていない。歌の選択に関しては、日本の詩歌の代表例であり、かつまたヨーロッパの人の趣味と理解に適うものとしたと言っている。

（中略）総じて納得のいく選択だが、『万葉集』に関して言えば、柿本人麿、山部赤人、大伴旅人がないのは少し寂しい。（中略）『万葉集』からの歌が多いのは、明治期の風潮に応じたものでもあるだろう。

石澤氏が指摘するとおり、大部分が万葉歌である。しかし、それは「明治期の風潮に応じたもの」というよりも、万葉歌が日本の詩歌の特徴をあらわす代表例であるというフローレンツの考え方によ

るのであろう。単なる時代の風潮であれば、当時も代表的な万葉歌人とみなされていたはずの柿本人麻呂の歌が採られていないのは不審である。したがって、むしろそこにフローレンツの積極的な意図と取捨選択が行われているとみるべきであり、それがひいては万葉集への志向としてあらわれたと考えるべきであるだろう。

そこで次に、どのような万葉歌が採用されているかを確認しておきたい。

原著ではおよそ各出典名と、それが『万葉集』である場合にはその巻番号が記されていたが、当然のことながら『国歌大観』（明治三六年刊）によって付された歌番号は掲載されていない。訳の大意から判断して、便宜上、国歌大観番号を補いつつ万葉集歌のみを掲出すると、次のとおりである。

Ⅰ

（1）万葉集5九〇四～六　山上憶良
（2）万葉集5八〇三　山上憶良
（3）万葉集19四二二〇～一　大伴坂上郎女
（4）万葉集13三三一四、三三一七　作者未詳
（5）万葉集18四一一三～五　大伴家持
（6）万葉集18四一〇一　大伴家持
（7）万葉集13三二四八～九　作者未詳
（8）万葉集13三二五八　作者未詳
（9）万葉集13三二八〇　作者未詳
（10）万葉集13三二五五　作者未詳
（11）万葉集13三二二四　作者未詳
（12）万葉集13三二八九　作者未詳
（13）万葉集13三二九三　作者未詳
（14）万葉集13三二七八　作者未詳
（15）万葉集13三三一〇、三三一二　作者未詳
（16）万葉集13三二七〇　作者未詳
（17）万葉集9一七四二　作者未詳

Ⅱ

（18）万葉集13三二二一　作者未詳
（19）万葉集1一六　額田王
（20）万葉集19四二〇九　久米広縄
（21）万葉集13三二二二　作者未詳
（22）万葉集13三二三二、三二三三　作者未詳
（23）万葉集18四一二二　大伴家持

Ⅲ

（24）万葉集19四一六〇　大伴家持
（25）万葉集13三三三二　作者未詳
（26）万葉集5八〇四　山上憶良

Ⅳ

(27) 万葉集13三二四五、三二四六　作者未詳

(28) 万葉集13三二三四、三二三五　作者未詳

(29) 万葉集6一〇五三　田辺福麻呂

Ⅵ

(30) 万葉集9一七四〇～一　高橋虫麻呂

現代詩歌を含めた全五十七項目中、実に三十項目が万葉集の歌であることがわかる。題として目次に掲出されていない反歌などをも含めれば、歌数そのものは三十首を上回る。しかも、巻十三の作者未詳歌からの採歌が極端に多いことがわかる。また、多くが長歌の翻訳であるともみられる。これは、先述の「最初の比較文学論争」中において明らかにされた、フローレンツの日本詩歌への思いと合致している。

日本と欧州と、その言語に根本的差違の存せるは姑く之を惜くも、その詩的理想に於て、両者の間に一大渓谷の横はれるを見る。(中略)若し良好なる翻訳に依りて、之を欧州の評家に示さば、彼等も亦かゝる短詩の中に讃嘆すべきもの多きを見るべし。然れども彼等は頃刻にして之れに厭き、更らに邃奥なる長編の作を見んことを望むならん。故に善良なる長歌の翻訳百篇は短歌の翻訳万篇よりも、日本文学の光栄を高むること遙かに大なるべし。是れ余の確言せんとする所なり。

(「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」『帝国文学』第三号・明治二八年三月)

日欧間の言語の差違は当然ながら、「詩的理想」において大きな隔たりがあるために、ドイツ語圏の読者に対する日本文学の紹介としては、長歌の翻訳が相応しいと考えていたことが理解される。短歌や俳句の類であっても、上田が攻撃したような説明的な翻訳がなされたのは、第一には、一語に集約された日本的な思想や概念をドイツ語に置き換えることが不可能であったからではあるが、ここにあるように、ドイツ語圏の読者の評価に耐え得るようにとの思いがあったからとも思われる。ドイツ語による表現の詳細にまで立ち入った分析はできかねるが、日本の詩歌の魅力をいかに訳すかにフローレンツの注意が払われていたようであることは、むしろその説明的な翻訳によって明らかなのではないかとも思われる。

たとえば(4)「Mann und Frau」は、もっとも多く翻訳された万葉集巻十三からの歌であるが、本来の万葉集中の歌の配列に関わらず歌が取捨選択され、異文化圏の読者にも理解できるよう配慮されたとみられる。当該の万葉歌をあげておく。[21]

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに　己夫し　歩より行けば　見るごとに　哭のみし泣かゆ　そこ思ふに　心し痛し　たらちねの　母が形見と　わが持てる　真澄鏡に　蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　馬買へわが背　（13三三一四）

反歌

泉川渡瀬深みわが背子が旅行き衣濡れにけるかも　（13三三一五）

或る本の反歌に曰はく

真澄鏡持てれどわれは験なし君が歩行よりなづみ行く見れば　（13三三一六）

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ　（13三三一七）

右は四首

原著では、まず三三一四番歌の長歌が「Frau:」として訳出され、或本反歌の第二首目である三三一七番歌が「Mann:」として続けられている。管見では、三三一五・三三一六番歌に該当する部分は見出せなかった。

三三一四番歌の「たらちねの　母が形見と　わが持てる　真澄鏡に　蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　馬買へわが背」は、次のようにドイツ語訳されている。

Den Spiegel und den Schleier hier,
Den Mütterlein mir jüngst bescheert
Beim Abschiednehmen, geb' ich dir:
Geh hin, und kauf dafür ein Pferd!"

上田万年が俳句の翻訳を例にして指摘したように、直訳しつつかなりの説明をも加える、いわば意訳であることがうかがえる。参考として、フローレンツのドイツ語訳を忠実に英語に訳したと自身で表明している、アーサー・ロイドによる英訳版の当該箇所も、次にあげておく。

The mirror that my mother gave,
As keepsake, when I said adieu,
The veil, likewise, she bade me have—
Take it—'t will buy a horse for you.

いずれも、「たらちねの」や「真澄鏡」といった日本詩歌に特徴的な表現は削ぎ落とされ、母の形見として私が持っている鏡とベールであなたの馬を買えというシンプルな内容として読める。これに、男性からの返事として、三三一七番歌の翻訳詩が置かれること

で、男と妻という題に相応しい、夫婦が互いを思いやる問答が形成されている。

一見、実際の『万葉集』のテキストを無視したやりようにも見えるが、現代では巻十三の長歌の多くが、元来は反歌を持たなかったらしく、しばしば別歌の添加がみられることが知られている。ほかにも、(12)「Abend-Orakel」[万葉集13三二八九]、(13)「Endlose Liebe」[万葉集13三二九三]、(15)「Heimhche Liebe」[万葉集13三三一〇、三三一二]、(16)「Zornige Eifersucht」[万葉集13三二七〇]、など反歌を省いて長歌だけを紹介した例がみられる。他方で、(11)「Sehnsucht」[万葉集13三二二四]のように、反歌だけを取り上げた場合もある。これらのことから考えると、単にドイツ語圏の読者の嗜好を念頭に長歌だけを取り上げたというのでもなく、テキストを客観視した上での合理的な取捨選択であったと考えられる。

また、(7)「Der Einzige」[万葉集13三二四八～九]などを見ると、先の例では削ぎ落とされていた、いわゆる枕詞の類をも翻訳しようと試みているのがうかがえる。「藤波の　思ひ纏はり　若草の　思ひつきにし」(三二四八)といった表現は、「藤波の」「若草の」がそれぞれ「纏はる」「つく」という語を導き出す働きをしているが、藤の蔓や青々と伸びる草が訳出され、歌中の人物の心情の喩えとして言葉がつくされているようである。

全体を通じて、万葉集本来の歌の収載順とは異なり、分類も先述のように独自の視点でなされている。これは万葉歌以外の詩歌も含めていることにより、日本詩歌の特徴という大局からの視点で編纂された故であるといえるだろう。

それにしても、万葉集巻十三の歌の偏重はいかなる理由によるものだったのであろうか。現時点で明確な答えは用意できていない。ただ、作者としての歴史上の人物や特定の年代に縛られない、純粋に日本語文学としての特徴を伝え得る素材として理解されていたのではないかと思われる。

五　おわりに

明治期のフローレンツの日本文学研究は、テキストの客観批判をもたらす画期的な内容であった。そうした視点から選択された、異なる言語文化圏に対しての日本文学への招待である『東の国からの詩の挨拶』は、『万葉集』巻十三の歌を中心に編まれていた。本稿では、翻訳表現の是非について分析するまでには至らなかったが、フローレンツがいわゆる枕詞などの古代の日本詩歌に特徴的な表現をも尊重しつつ、そこに広がるイメージを異なる言語文化圏の人々にできるだけ伝えようとしていたことは理解できたように思う。

いわゆる序詞・枕詞は、日本文学に特徴的な表現として知られて

いる。それらは物や事によって特定のイメージを喚起しつつ、心情表現へと連合して、言語表現の世界に豊かな広がりを持たせるものといえる。そのようなイメージの連鎖は、日本語の性質と相俟って、独特の表現を生み、なかでも『万葉集』を中心とした古代和歌に多く見出すことができ、時代的な特徴のひとつに数えられる。和歌を語るにあたって、そのような表現の源泉を探ることが重要であるのは言うまでもない。

本稿で取り上げた書を含め、万葉集が享受した中国語文献および万葉集の後世におけるさまざまな展開の一部は、前掲のとおり、奈良県立万葉文化館企画展「万葉集との出会い―万葉文化館コレクションより―」において紹介することができた。当館所蔵の貴重本の数々を展示できたなかで、他の外国語訳本も含め、一般的な万葉集関連の展示とは言語も趣も異にする本書などを独立したコーナーとして一括したことで、特徴のある展示になったと自負している。それらの諸外国語訳本は、現在当財団が運営する「ＮＡＲＡ万葉世界賞」[22]にも繋がるものであり、異なる言語文化圏における『万葉集』の展開を垣間見せてくれるものであった。

筆者は以前、山部赤人研究の一環として、「叙景」という概念語の成立について考えてみたことがある。[23]叙景という概念語は、西洋の詩の分類（叙事詩・抒情詩・劇詩）に対して、叙事・叙情・叙景という日本文学独自の分類を提示することで獲得されたと考えられる。その西洋詩の分類は、一八九〇年頃に行われた坪内逍遙による日本初の「比照文学」の講義によって広く知られたのではないかとみられる。叙景は正岡子規の文章中に初見の語であるが、西洋文学との対照により獲得された国文学への自負があったようで、子規は叙景を、西洋文化に対する日本文化の優越点として意義付けていたことがうかがえた。近代歌人による写生への傾倒は、万葉歌の近代的な評価の基盤でもあり、それはまた、西洋文化の洗礼を受けた上での近代詩歌の形成とも深く関わっていたとみられる。そうしたなかで、子規は日本の詩歌に西洋的な叙事性と叙情性とともに、日本独自の叙景という特質を見出そうとしたと思われた。それが、明治二五年十月の正岡子規「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」（『早稲田文学』二六号）での発言に端を発していたことを思うと、本稿で取り上げた事項との同時代性は極めて興味深い。当時の上田万年は急速に西欧の文化を享受しつつも、だからこそ国粋主義的な発言をせねばならなかったのであろうが、子規の文章からもまた同様のメンタリティがうかがえる。

前述の上田・フローレンツ論争が感情論を最後に収束してしまったのは残念なことであるが、これを文明開花期の蒙昧として片付けてしまうことはできない。近年でも、筆者が参加し得た国際シンポジウムなどの席上で、類似の感情論を垣間見ることが皆無とはいえないからである。それは日本人に限ったことではなく、各国間にお

いて、多かれ少なかれつきまとう感情であるらしい。しかし、現代において自国の文学を研究するに際しては、優劣という価値判断のためではなく、研究者の母語になる文学研究を客体化するためにこそ、異なる言語文化の特徴を知り、外部からの視点を得る必要があると考える。

フローレンツの異文化圏からの視点は、あらためて日本語における表現の特徴を浮き彫りにする契機となり得る。その意味で、本書の意義は今日も色褪せてはいない。日本詩歌におけるイメージの連鎖をどのように詩学として理論化し得るか、また、巻十三という歌巻、ひいては『万葉集』という歌集そのものの普遍性と固有性をどのように位置付けるかについては、今後の課題である。

注

(1) 邦題は、石澤小枝子『明治の欧文挿絵本―ちりめん本のすべて』(三弥井書店・二〇〇四年三月)に拠る。古書店目録などでもほぼこの邦題で扱われていることによる。

(2) 佐佐木信綱『萬葉集事典』平凡社・一九五六年

(3) 展示に際しては、(1)諸本、(2)注釈書類、(3)影響と享受、(4)諸外国語訳、(5)万葉集の現在、の五つのコーナーを設けた。このときの展示企画および「奈良県立万葉文化館　展覧会だより」(第10号／二〇〇五年一〇月二二日発行)の執筆・編集は、当時の松尾光万葉古代学研究所総括研究員、松田信彦同主任研究員、および筆者が行った。図版用の写真撮影や実際の展示作業については、当時の平岡照啓万葉文化館総括学芸員、福田道宏同学芸員にお世話になった。なお、人麻呂像の解説部は高岡市万葉歴史館の新谷秀夫氏のご協力を得た。

(4) 佐佐木前掲書。なお、旧字体は新字体にした。

(5) 石澤前掲書。

(6) 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社・一九九五年三月、年譜および考証に拠る。

(7) Arthur Lloyd, *Poetical Greetings from The Far East*, 1896.

(8) Hans Bethge, *Japanischer Frühling*, 1911

(9) Gottfried von Einem, *Japanische Blätter*, 1952

Ludvig Irgens Jensen, *Japanischer Frühling*, 1917/1922 rev.1957.

なお、万葉歌をより多く取り上げたアイネムの歌曲集の世界初録音は『秘められたウィーン歌曲―時代・国々・人々のはざまで』オーマガトキ・

一九九六年）に収められている。

（10）『帝国文学』第一号（一八九五〈明治二八〉年一月）の雑報「寄贈書目」欄に拠る。

（11）①上田万年「批評　Dichtergrüsse aus dem Osten.　ドクトル、フローレンツ訳」『帝国文学』第二号・明治二八（一八九五）年二月、②カール・フローレンツ「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」同第三号・同年三月、③上田「フローレンツ先生の和欧詩歌比較考を読む」同第五号・同年五月、④フローレンツ「上田文学士に答ふ」同第七号・同年七月、⑤上田「再びフローレンツ先生に答ふ」同第九号・同年九月。

（12）千葉宣一「明治期における〝比較文学〟の運命―比較文学への道・比較文学からの道―」『現代文学の比較文学的研究―モダーニズムの史的動態―』八木書店・一九七八年

（13）佐藤前掲書。

（14）佐藤前掲書、第一編終章。

（15）*Geschichte der japanischen Litteratur*, Leipzig, 1906.

（16）佐藤前掲書、序文。

（17）Piason, *The Manyosyu Book* V, Utrecht, 1938. Preface.

（18）*Japanische Mythologie*, MOMG, 1901.

（19）品田悦一『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典』新曜社・二〇〇一年二月

（20）明治三七年刊の第八版（個人蔵）を底本とした。

（21）中西進『万葉集　全訳注原文付（三）』（講談社・一九八一年）に拠る。

（22）万葉集及び万葉集に関する古代文化研究や万葉文化の国際的な展開・普及に顕著な業績・功績をあげた人物を顕彰するために創設。奈良県主催。http://www.manyo.jp/nara_manyo_prize/

（23）口頭発表「山部赤人のいわゆる叙景―近代的評価からの脱出―」全国大会国語国文学会夏季大会・二〇〇七年六月